

中国生まれの一字号

昭和14年(1939年)日中戦争のさなか、中国の一字山にちなんで一字号と名づけられたロバが、物資輸送で活躍していました。しかし年老いたため老後は安らかに過ごさせようと、昭和16年(1941年)に上野動物園に寄贈されました。

動物園では子供たちを乗せた馬車を引き人気を集めていましたが、昭和37年(1962年)一字号が27歳(人間で言うと90歳近い老齢)のある日、ポップコーンをのどに詰まらせて死にそうになりました。

歯が悪かったことがのどに詰まらせた原因でした。上下の前歯16本のうち2本だけがあるだけでそのほかの前歯は根しかありません。奥歯は幸いにも24本残っていましたがだいぶ磨り減った状態でした。

入れ歯を入れたロバのはなし

当時の動物園の人たちは、何とか一字号にもう一度噛めるようにしてあげたいと思いました。そこで「ロバの入れ歯を作ってほしい」と東京中の歯医者、歯科大学に問い合わせをしましたが、なかなか見つかりません。「それでは・・・」と手を挙げたのが東京医科歯科大学助教で青山に開業していた故石上健次先生、後に昭和天皇の御殿医になられた名医でした。

治療中の
故石神先生



そのときの様子を岡山大学歯学部小児歯科、岡崎好秀先生が、存命中の石上先生を訪ねてお話を伺っているので、その概要をご紹介します。

「ロバの歯の検診をしたところ、入れ歯を入れるために不都合な歯があった。しかしその歯を抜くと、高齢のためにショックを起こす可能性があった。そこで入れ歯を入れやすいように歯を削り、歯の型を採ろうとした。しかし、ロバの大きな歯型を採る道具(トレー)がないので、歯科の材料会社にお問い合わせ、特性のものを作っていた。」

ロバ用の型採り道具はできたものの、問題は型採りのときにロバは暴れたりしないだろうかということでした。さいわい印象剤の匂いが気に入ったのか、じっと固まるのを待っていたそうです。自分のためにやってくれていると、ロバもわかっていたのでしょうかね。

「むしろ大変だったのが、歯の噛み合わせの高さを決めるときだった。噛み合わせの高い入れ歯を入れると、咬め

ないだけでなく、すぐに壊れるだろう。なにしろロバは何も言ってくれない。おまけにロバの顔の長さは40センチもある。この状態で噛み合わせの高さを決めるのが至難の技だった。

次は入れ歯の歯の部分である。人間の場合、あらかじめ人工の歯があるが、ロバにはない。そこで他のロバの口元を写真に撮り、一本づつ歯を蝋で作られた。」



ロバの人工歯がないので、一本づつ、他のロバの写真を見ながら、歯を作った

やっとのことで、入れ歯は完成しました。あとは義歯の装着です。でも本当に動物であるロバが義歯を入れてくれるかが一番心配でした。しかしそれは思い込みに過ぎなかったのです。

かたずをのんで見守るみんなの思いをよそに、ロバは入れ歯を入れた数分後、草を食べ始めました。それも痛みも訴えずに・・・?

メデタシメデタシ。

入れ歯を入れて元気になった一字号



やはり自分の歯が一番！

野生動物では歯がなくなると生命に危険にさらされると言われています。ロバの一字号は、入れ歯を入れることで食べるできるようになり、健康を取り戻しました。

しかし総入れ歯は、本来の自分の歯に比べて約20パーセントしか咬むことができません。

やはり、自分の歯に勝るものはないですね。

は：はじめて入れた

は：歯だけど

げ：元気もりもり

ん：ん？

き：気をつけよう食べ過ぎに！